寛永諸家譜

藤原氏戊二冊之内一

道兼流

100

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (100)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

大久保

寛永諸家系図伝

藤原氏

道兼流

大久保

忠一 小家

淺草文庫

道兼

法興院摂政道兼公二男粟田関白と

基隆

正二位　中納言　藤原左衛門督と号す

基房

正四位下　中宮亮　摂津守　権中将

宗忠

宇都宮乃庄司

宗綱

八田権守

朝綱

宇都宮左馬頭　武者所

成綱

左兵衛尉　左衛門尉　大庭二郎

頼綱

弥三郎　宇都宮検校

泰綱

正五位下　下野守

京綱

従五位下　右馬頭守　下野守

貞綱

従五位上　伯耆守　下野守　参河守

泰宗

五男　常陸介　左衛門尉　法名蓮恵

時綱

参河守　左衛門尉　法名蓮意

恭藤

左近将監　法名蓮常

冬列　和田妙國寺乃おゝ　住を

家紋　左巴　多ゝ花とゝへ紋とを

常意

道意

宇都宮を　宇津と称を

道昌

嫡男　辰若を　松平ゝ　称さ

住光　ゝ

常若

八郎右衛門尉　童名　辰若

住光　ゝ

忠与

三郎右衛門尉　法名覚永

忠茂

左清門五郎

天文十六年二月四日死す

法名源秀

忠俊

新八郎

子孫ハ無之ハ譜系ハ

忠負

平右清門尉　宇津ハ

大久保ハ縁ハ

天文六　廣忠卿十二歳乃御ハ

時別ハ　式部忠負

兄新八郎忠俊ならびに一族ならびに
同志乃者四人也お諫　廣忠卿とむく
忠誠乃儀ニ付　別忠負も
ましく功あり

同十一年　廣忠卿乃叔父義人伝定
野心あるとて紀州泉之郎を
義人ハ屋敷を忠負と忠俊お誘して
泉三郎を攻　廣忠卿ハ
これをよろこばず
義人の家人なり来

つるく　廣忠卿ハ屋敷
弘治元乙卯別盤石合戦のとき
忠負ならびに嫡男忠世次男忠佐
ならびに同志乃者七人ともに
抜戦勝利とえて歌まげて城に
いる

永禄三庚申刈屋十八町縄ぬ
の合戦に歌あり忠負
忠世忠佐ならびに一族ならびに同僚

五人ともに勅戒をやぶる
天正十年十二月十三日七十三歳にて
死す

忠世

七郎右衛門尉
天文十五年冬別所浜村合戦の時
忠世十五歳にして初て敵と組
あらそふ事一日に五度なり

同十七年冬別山中合戦の記忠世
一族とあひともに敵をうちとる事を
やぶる
同十八年冬別安祥の城をせめ
と記忠世敵とあひくふる事数度
にして一番に首級をとる
弘治元年父忠員と共忠依当番にて
尾別蟹江小とをもひさ戦功あり
永禄三年尾別石瀬合戦より忠世

忠信同輩五人あひともに歌と絵と
あるをもて
同年冬別刈屋合戦乃ち紀忠負
忠信等と力をあはせ戦功あり
同六年冬別一向宗蜂起の時紀
東照大権現の旧臣人技宗門に帰する
おのゝ歌を奉り忠世が
一族冬別和田村よりあひ大久保
彦八郎が宅を焼き同志乃ものを

あつめ集れを酒をもて十月より
翌年正月よりいくさまで合戦ごと
い色どもいまゝ雖雖を尖せどもが
勝へり
大権現よりつげ給ひて和睦
の事をおほせをたてまつりをひて
中年均を
元亀三年
大権現と武田信玄を列三方原

をひく合戦のときに忠世が兵士敵と
おもひ切をあひて敵の先陣退
敵を去りとゝ大敵又競来り
ゝ味方利をうる忠世こと
後ゝを世来りく
大権現ゝ告そ給ふくいとゝ
ねよ遇を以味方諸将とお約し
そのくそのの退散すれとゝ乃軍士
とゝ引ひくく一所ゝあひあつまるべき

乃ひひゝり
大権現ハ浜松やゝり濱松の城へいとも
ゝ御ゝ
大権現式部ゝ廟ゝ御猟三
ゝ忠世ゝ行ふ忠世をるゝ
犀潭乃西よりゝ御猟を挙乃時
あとゝり退来る軍士あひあつまれ
敵ゝひきゝとゝ敵をとゝ
ざるゝ鉄炮をゝるゝさくよをひく

敵これを迎ふるあるべうれ共
信玄ハ犀潭乃近邊に陣とり
忠世も海辺諸手の鉄炮をあつめて
信玄が旗本へうちかけうち敵
軍隊動と偽これを兼迄とふ
天正二年
大猪狸兵をすめて遠別乾よりう
川きりぐ乃初てとゝび敵うれ
軍乃うしろをうかゞふ忠世殿して
敵をうよりり敗走を
同三年冬別兵藤をうちくく
大猪狸と武田勝頼合戦のとき織田
信長兵を川ゝ表軍乃あひだう
きうり柵を構あいさゆ信長の兵
柵乃外へいでゝ西さふたうりんせす
忠世まへどよりとその家人跡に残れ者
をうゝ歩卒とる前陣よ
あるとき弟忠佐北さうていく

今日乃軍ハ信長の兵と共に先登
をしやうに是程をいそぎて合戦
をすべしといふ忠世すなわち
うけ兵をもはけ忠俱よさづく
大将現乃命ていとく家の諸組共
うちうまをえていとく歩兵をもて
鉄炮をもて忠世が組よりおもむく
おひ馬ハ一騎もいそぎ

ざるの台所乗右衛門日下部兵右衛門
これをうち取ふ
忠世忠俱諸組共鉄炮をはなさどり
をうちをみたるかゆゑ勝敗
の先を級をを諸軍おひをうて
欲兵をうち勝敗大ていの級小を
同年
大将現逆列二俣の城をせめらるふ
とさ城いまぐおちす

大指現兵をおさめくかつを申ふ
と紀忠世とゞ申りくその堅をま
り忠世武備をゝめくく對陣を
今年を別二俣乃城をとりで
とうゝく忠世これを申りは
大指現光明城をせめきまふ
同年乃名二俣乃城を攻をのゞを
さふ
大指現二俣を忠世ゝ申りくさ城

を申ふ
同巳年
大指現乾の城を攻ふとき忠世兵
を率ひくく嶽山ゝ出たりさゝ
乃がり俯しくく敵乃城を見くく進
さふ敵拒天賀之右衛門城をさゝ
て山ゝ入忠世約命とゝ申り
いゝ山中よゝゞ申りこゝ兵を率て
敵をせゝる事巳ケ年ゝしく

山中とくくゝ年ぐ

同十年

大指現甲別をせめたまふとき忠垂

先鋒として伝別りいくさ

敵軍とあひふ國中の者凡

をのぞみくゝ参りてたびくゝ

伝別乃忠士先方流と号す又敵とうちもの

ちまあり忠世対陣ちゝ今年

より同十三年よりゝ合戦ちゝ

やはずあるひそ敵墨をせめやぶり

あるひハ和睦を設しゝ志と服

ちる事ちるてぐ御ちれあひぐ

乃戦功あるゝふ忠ちす家人等

をのゝ軍忠をちげはす忠著

りの公六人

大指現御感状とを給ふ

同十八年関白秀吉大軍と率ゝ

相別小田原乃城をかこむ乃と考

大隅殿兵を率ゐて
こもふ城乃おつるをおそれて乃ち
秀吉より其子城小山と亜ぐ忠世と
呼ゐこれをさづくる後
大隅殿忠世を小田原北城主に任地
四万五千石を給ふ
文禄三年九月六十三歳にして
死す　法名日脱

忠佐

治大夫府
弘治元年乃別解江合戦乃とき
忠負忠世とあひともに軍功あり
同二年乃別乃軍扇崎乃六勝家
長を引ゐて参別　後見ゐるゐ
合戦の紀勝家引ゐとぐ乃別
忠佐るとゐ急ゐ急と延歌
軍ゐ引ゐ徒をゐ勝家と突
勝家逃ゐぬ

永禄三年参河刑部合戦に進む
城の色々いろう一族をひき同軍
八人と徒をゆづり敵をうち勝利をは
さうり
同年色別刑部合戦乃ち紀忠世等
と五人敵軍をうち破れ
同六年一向宗一揆のとき毎日毎夜
合戦しそのあひだ元長其面あり
をひく敵と徒とあり事三度
ありをそれ元長武勇を感
美をそれから戦を捨し敵を撃
事数度ありそれども味方さど
をうしなはものおかるがゆへ
大将現り告さうはつうく和睦の
さうことをめぐらと
同七年東参河御池合戦に忠依
服方より徒をとりく撰り敵を
うちとれを敗をせしを

同十二年
大将現蓮列蓮川をせめ天王山小く
そこ迄ふとき忠佐一番よりそみて
敵陣ヲいるとこれ軍将と斬こと
前をそこなくこれを敵を
元亀元年江列婦川合戦ニ忠佐
命をうけ面々軍勢を指
揮ー敵とうちやぶれ
同三年蓮列見付合戦ニ大敵
競来れ忠佐なをびて弟郎七郎
都筑友一郎大久保荒之介四人敵
うちとさ多年八郎忠勝ると迄
敵陣をはけこうすぐよ忠世も
又こうち見ヲ流る命
を金ふして天竜ヲいくる
同年十二月三方原合戦のとき敵
兵勝ヲ乃ちとい忠佐首級
をもること

天正三年長篠合戦の刻忠作
作りもち忠世が陣より麾下
の諸軍足軽鉄炮をつきどうあま
りつけるかわるがわる鉄炮と武田
勝頼が軍中よりうちかけられと
やがて
同年遠刻諏訪原城をもとく
せられたるとき知乃刻辰
乃刻より巳午二人をうち
うち首をとる献ず
同十二年長久手合戦に
忠作　命をうけ海内池田
之陣にいたり歌をうたひ池田
勝入森武蔵守長一をみうちに
忠作先をうけて足軽をつかい
鉄炮をうるち抜たかふ歌つ井に
敵を寸軍やうそな
大将秋忠作をうべし　深き忠大歩よ

命じ給ふの戦場にて
清士乃甲乙を
きゝ長立て関原陣乃とき
石田院殿にきこゆ
さい国よりいくさ
大将現の麾下にあり
大将現沙幼雅れ沙時より数交の義
り毎度忠節をせずと云事る
しあひ歌をうらあひを絶と

あり事れ事何者とうふ屋とず
白刃ら矢れあひぶよ沙ゞり著ら
とうれ武具きでく斬やぶりを
いをどもつ升り多を全して
疵をうゝかを
同六月後別沼津の城を忠信よ
をを海りり二万石れ地を行を
同十八年七十七歳ゝ死す

某

大八郎
永承三年安波彌をうちとる
二十二歳にて討死と

某

新義
元亀三年壬申三方原にて
討死 二十六歳にて戦死

某

勘七郎
天正二年壬戌別所をうち
二十四歳にて戦死

忠為

長十郎 稙右衛門尉
天正元年
大稙現東条河沖進發のとき敵
兵競来る忠為はせをとりて相接と
ともに敵兵引きぞく討

大指現乃伯耆の国に敵兵数
多ありとはいえども既に引き
ぐるのゆえ手負と金子を乞うと
ばかりを向後敵兵庭多れとき一人
やりて扶持を給ぐべしとなり
同二年壬辰別紙をひく
味方ひさきありぐるとき敵兵
後ありをむ忠為兄忠世と共に
殿して敵をうちさまれを救を

きしむ
同三年壬辰二俣城を兄忠世
ゆ持乃とさ
大指現忠世乃伯耆に城ハ
敵玉のはひるまれで忠世が
一族をしてあひたるこがりすを
殿ふるの旨ありを忠為も又
忠世乃原寸ゆ忠世和兵
小田原乃城と伯耆の時忠為も

海を渡り候て
数年十四万石以川を敵以忠總濃別
大坂の城を攻られ候時忠為を
あいもなりんと云ふ忠為許諾を
志れば手でとり
大権現へ上申り達候ゆ忠為をめて
乃こ海りく忠總ゆ為なり忠為先ゆ
志ゆりん事 上意ゆ云ふの旨
なり

同十九年大坂御陣乃ち紀州
公ゆ雇為り出法を忠總ゆ
忠為ゆ為を遣ひ鉄炮を
とさり
大権現上使として加藤平右衛門
豊後を脇坂と申ゆ忠為
軍ゆ忠為これをいさめすみ
やかゆ去とし
命をうけ

元和二年
大猷院殿御代ノ別忠總をもつて
忠為を　御前ニ召寄
約命ニ　ゆ　年来此事に
をよび忠為ハ　のこ　ハ
御ノ大恩ハ　新田をひらく　ハ
ハ　云　を　新田切をひらく又
云　を　ハ　ハ
ハ　ハ　一百石をもつて

忠為ハ　たまふ　ハ　汝も
御ノ　ハ　ハ
忠功をもつて　ハ
ハ　ハ　ハ
忠為肝ハ　絶　ハ
ハ　ハ
法名日宗

正信

従六位右尉

寛永十年より始まる

将軍家より渡し給ふる

同年八月より代々組の書を

つとめる

忠知

源三郎　左近衛

慶長十三年より始まる

台徳院殿より許渡をこのとき

忠知十六歳なるより　侍従

同十四年武列　若狭村二万村

より　を侍

同十九年大久保相模守謀叛

忠知も御　警固

の親族より

同年の冬大坂御陣の時紀
摂州平野にしてひとく忠死をと
げられける
翌年の夏大坂再陣ありしに
青山伯耆守忠俊が組に属して
供奉をはげむ五月七日平野
急にはしりをひらく合戦をなせり
もじゆりれ刻忠知をるいら馬
とをくめぐく敵陣とおつり城の柵際

ふかゝりし大久保甚右衛門すゝみよ
城織部等城ぎはよりきゝける
あつまりて一級ありけるよ
ひきありぞくの敵兵数多すゝみ
きたりきまをとりこみくらんと
すりと紀忠知これうりし汝等味
方とありはやといひけまへば敵兵
まさをとかくのがれさる後大久保
玄蕃以も使うこ城方よりきゝける

とし に忠俊が陣をうつる凱旋乃
乃ち右ゝ軍功乃賞より上総
の国新堀村をもつて采地と
くらくゝ給ふ
寛永三年　仰をうけ御
使者をたてゝ布衣を着せ
事をゆるさる
同九年
将軍家の約命をうけ事を海内
に付と云ふ
同十年清書院の絵図作り
ゝ甲冑黒漆ゝ大坪村
ゝ色をとゝ給ふ
同十三年右ゝ役をあゝて
清小姓組の番頭とゝ
同年乃名を五位下に叙し
左ゝ兄ゝ伊豆

忠貞

彦十郎

享年十九年

大隅殿より法名を

元和二年

右徳院殿より法名を

清小姓組の者をつとむ

寛永十六年清水町の組と

なる

同十六年乃至布衣と為すり

るをゆるされ

同十八年八月十二日　作り

ゆる

竹子代君より法名を

忠重

彦兵衛清尉

寛永十六年

将軍家を祈礼を
同十八年二月御書院番の組に入

忠高
市十郎　母ハ稲垣平右衛門長茂が女
寛永九年
将軍家に謁し奉る
同十三年　作を以て近侍を

忠久

忠長
源四郎
甚右衛門尉
元亀二年
大猷院殿の御代に長崎三郎
伝康と号す
天正三年　甲州の軍兵を引小山の
城に籠り　勝頼公信康を兵を殺し給ひ
其後忠長に召出され小山を

りをいく敵とおぼゆいまぐ
勝負を決せざる引組むとうに岸
下ふもつ志ハあれど敵地ひとうれを
うけ事あるつぐ信康をるつぐ見
を感じて供分をとまふ信康を
逝去の後
大将現の厳命ゆり見の忠世よ
屋しく遠別二候よ居を
同十三年 忠世よ屋しく信別よ

りをい志田意ゆ中鳴与一良
なるに小忠長るに殿られとさ
敵兵跡をふ忠世お戦く見を
級をせむ敵兵ハ後を接
てふるものあり忠長られ後を
く両陣をこ進より後忠長ゆ
忠世と不和りうぶゆ
大将現乃麾下よるびを
同十八年小田原陣よ供なれとき

大指現住京伺あるゝ命ゝゝ
のゝ伺ゝゝ忠世と忠長不和の由
ゝゝゝゝ和睦せよとの旨あり是
ゝゝゝゝ伺ゝゝ忠世ゝゝ屋敷
享年十一ゝ五十三歳ゝゝ死
法名日穆

忠重

甚九郎

剃髪ゝゝゝゝ雲と号し江州
脇所より住

長重

甚右衛門
享年八年長重十五歳のとき
ゝゝゝ
台徳院殿ゝゝゝ伺つる
同十四年武州二郡若葉村
ゝゝゝゝ住ゝ伺

同十九年大久保右摸守殿動乱
をうけられよりて長重も陣こ
整居を
同年冬、大坂御陣乃時搦別
軍勢よりひき敵とう
ゝ
翌年の夏大坂表陣のと紀そ
吉山伯耆ゟ忠俊ゟ紀ゟ屬こ
付奉一五月七日平野ゟ戦場ゟ

をひく敵をうらを首とバとゝず
こゝるとすめゝ敵兵の先鋒と
やゞりよゞれと逃ゝ城乃柵際ゟ
いるゝ山と紀大久保左る先城濠郭
等お集りて一応よりこゝる
東ゟ敵兵数多すみきゝり
ゝれをうこみうこんと寄長重ると
ひくゝいゝ汝等ハ敵と味方と
をこゝずやとゝふ敵兵ゝれと

吹うさうさハ味方ハ使者の跨ぎう
爲とふ上さまつげくいく
大聖寺をこれ江よりとり
ぢくりとらうくりうくし永
陣よいんとまうは大久保玄番も
ゆうゑ馳さうれ四人ともに忠俊が
陣江よいれ凱旋のうは黄よ
りまうく武列吉田のうら同國
る牽沢村うびよ紙の山蔵

村のうらふとうの合邑とうく
うゆふ
寛永五年　伊予ちと御使
義をけとむ
同八年
将軍家より軍列黒駒村ハ四月
びう欲田乃うう赤尾村う
をひうく飯能とくりくうふ
同十七年　為をとうをうり

浦鉄炮ヲうちとる
同十九年浦打れ頭とり騎
士十人なりびに歩り同心五十人
人をあづかる

長昌
牛之助
母八浦方同情ゟ頼水ゟむとめ
寛永八年

長好
七之助　母八長昌となる

忠教
平助　長崎奉行
寛永四年七月意別乾よりて
首級を切る

右軍家を祝礼ヲ
同十ムゝ浦ゟ法者乃紀りゝ
浦妻とはしゝ

同九年三月廿二日徒として長沼
冊設をつきて田口氏をして先
をうしなはしむ首級をはらう
同十一年十月伝別田口よりして
首級をはらう
同十二年伝別上田よりして敵首
をうばう
同十三年正月伝別藍木
をもつて首級をはらう

同年八月伝別上田の城をせめるとき
まづ敵兵あるを以て味
方戦死をのぞいて三百余人あり此とき
忠教と兄忠世とに
ゆくゆく敵兵みなぎりて首級
をはらう凱旋のち諸士軍功あり
その忠教褒賞とられを云上
すをよろこび忠世に属しとゝろく
ゝをひらく軍墨をゆるし

く戦功をとげ給ひあるべく
うぶ屋うす寸
文長十九年大坂陣のとき
大将秀頼きこゆ給ひ西つ御
陣をとりとる
慶長年の夏大坂乗陣のとき紀伊人
あひつくいきく
大将秀頼乃御旗をでかんを寺
忠教ゆれをきして京人を乃きて

いきく京御陣乃役ふるより御
旗とたふ一伝よあるなんぞ御旗の
きりぐくるあるんやさくよとひて伝
人きりつりうるをきもりうけり
台徳院殿よりたく寺て西つり古代役を
けとも
寛永九年
将軍家乃家ゑりより旧役をあるる
御旗をとりとる

同十六年二月晦日八十歳にて
死去　法名日清

忠名
　　幸助　長左衛門尉
　　元和八年
　　右近院殿小弥太様
　　寛永十六年五月朔日
　　将軍家の厳命をうけ腹切
　　忠教が遺跡を継ぐ

忠職
　　勘七郎

忠次
　　新兵

忠雄
　　若兵衛尉　大河内若狭守秀綱子

女子

大河内若狭守母なり

忠濃

姫立信下　治部大輔　相模守

永禄六年乃月

大指現一向宗一揆をうち平ゐと紀

和田り　波濃守大久保一族三郎

とむらひ申つる　はと紀忠濃十一歳

なり

大指現忠濃を言る説あり〻〻系こ乃

子をやしなひ近習の小侍〻〻を

ゐしと乃ち申ふをるゝ事をゝ

て申つゝ〻岩槻の城主ゝ

同十一年　武田信川乃城をせめ

乃と紀忠濃堀りゝ歌をうた

はとき忠濃十六歳なり

同十二年今川氏武田別越川の

様子あり

大将現ぜもせめ寄ふとさ天王山よ
りをりく叔父忠依後をうて敵を
つき忠隆をうびく首をとれべしと
いふ忠隆がいくさ見の勇よあるど
ちくまるうち敵陣よりけりく
うく首級をはきり
同年同廿天方合戦乃とき忠隆
敵首をうちとる

元亀元年織田信長と和睦義京
浅井長政と江州姉川にをひく
たたかふ

大将現信長ををひ浅井長政と
たたかうりやぶり

大将現信軍より知し敵を
うちく敗をせむれとき長政が
人数乃一を後うしりををす多
年八ちれをうてとふかがゆへり

御旗をかり忠隆卒十二騎沈むく
うれ陣をやぶり敵をうして御旗
をとりかへるとゝ紀義家が人数競
をとゝ紀義家の別も御首級をはう
同三年三方原合戦のとき
大将現利とらひさまひ御退去
のとゝ紀忠隆うふふく供をし御
馬乃くつをとゝ紀を小栗忠義
敵のうをとゝ紀ゝ地をとる

大将現忠義ゝ敵ゝ乃ゝ御ゝ
汝ゝうをとゝて忠隆ゝさづけよと
ゝ忠隆　仰ゝとゝの馬よ家
て供をを
天正三年小山諏訪原乃途中ゝ
をとゝ忠隆敵兵ゝ出をとゝ
御ゝとゝ出をとゝ
同十二年百別七人を合戦のとゝ紀
大将現ゝゝ御見をとゝ先陣

りとゝもこさを海ひ忠陳て
命じ〻くの海りてゆが麾下乃兵
みぐるに〻てみ出屈〻〻〻とゝる紀
ども諸士うけうぞして合戦を忠陳
歌陣よりを入あひ〻ひ徒を合
歌よつを〻く疲をうふとゝるよる
あり加りがゆへて歌をうるあこ
ざ紀なり忠陳つ〻こを海つる事
をこうず天正のうじめうり事

職て列し海分国ひよ紀伊
注来乃奉書あかれ諸る見
と仮を
久禄二年
大指現忠陳を〻〻
右徳院殿て海つしめ紀
事と申ひ父忠世死
てうら忠陳あひて〻〻小田原城
と海わ紀地七万石と賜す

文長五年

大相撲大坂西乃丸よりおりゐをとり紀
忠隆をめしくのくゐゐ三石達
中納云秀忠云冬〻河守秀康つゝ下野ゐ忠吉
いつれをゐ御家督ゐ〻さとゐり
忠隆いさめゐゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻
石徳院殿御譜嗣ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻
ゐと見ゐとゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻井伊兵部少輔
忠政榊原式部太輔康政ゐ〻中勢

大猶忠勝平岩主計親吉ゐ〻ゐ〻ゐ〻
正伝ゐ〻ゐ〻小忠隆ゐ〻ゐ〻ゐ〻御家督
乃ゐをとり給ふ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻
をの〻〻内談あり正伝をみゐ〻
三河ゐ秀康つゝ武勇揚せり御家督ゐ
ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻忠隆親吉等ゐ〻
ゐれゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻忠隆がいゐ〻
ゐれみる家大君乃賢息ゐ〻ゐ〻
するゐ〻ゐ〻ゐ〻乃道ゐれを論じゐよ

をよぼす

右徳院殿智勇ともに天下を
ゆづり給ふ中たれ君にあらずんぞ
不可なんとなると康政も亦忠隆が
ふるこころはどもとそなり しかく
六人おるべく 沖前ふたく 祖作を
作りて乃ち 正伝先あるべこころ
を乃べよとなり 正伝云と云ふ事
のごとしその次に忠隆よと云ふ

忠隆演説なるべき事はべこと
と記す

大猷院沖氣色あるべく 正伝と忠隆を
ちかくめさをはべ 正伝又
乃べくいくく秀康の嗣君なるべと
なり忠隆いよく前議をはべく
いくく玉那をせあると記ハ武勇を
もくくなりをおさむる世也
又武なるべ記あるべハあるべ

臣すぐに　位をとりかへ
右徳院殿　とりつぎ　をくられ
奥羽しらべ　をつるよハ　あるべ
玉郡をわたり　封ぢうとさハ　奥羽
もあつまし　天下授受乃事
をもくハ　帝子孫　長久の基なんぞ
私ハ　をさむ　しやにおり　而
あるべ　しるべ　折云言を　歟
をと云こ

大指揮のこ　汝等まづ　退市すべし
れ　おんぢ　をんぢ
なり　一日　と　をもく　ハ　六人　をめて
乃こ　をもく　家　忠　が　云　を　可
ハ　ふ　するし　督　そ
小夫　と　云　人　る　平　伏
右命　も　若　と
四十年
右徳院殿　征夷大将軍　小但

御祈願ありて　御叡　内乃記
忠隆騎馬ふく庵堂に列ス
最末子なり
同十九年正月忠隆出ありて沙動
氣とうふる江列ス左遷を
寛永五年六月七十六歳にして
死を

忠基

庄次郎

大猷院様つゝしみ海つゝ近侍を
又孫元年のあるに沙動氣とう
ふるかゆゑ　御親陣乃と記を
淺野彈正少弼に屬しゝ言葉
よりて十七歳にして死を

忠成

玄蕃頭　従五位下
寛永四年　後府をたゝくもの
大猷院様を祥礼をこれと記忠成十二歳

より

同十八日相列小田原陣同十九日
奥列九部陣文禄二年九列
名護屋陣等みな兄忠隆に属
しゝて陣す
同日年寄秀次家臣乃ちろ
ざ あるとき
台徳院殿を質として聚楽乃陣
に いまゝしゝて西つゝ屋ふよ

風説あり忠隆ちれとゝ
台徳院殿をすめ申うふ伏見へ
うつしゝて西つゝ秀吉と謁し
忠隆ハ伊勢亀の伊留守とつゝ
大稙現ゆゝふをひゝ古屋をさこ
めゝ亀よ伊ゝ伊ゝあり道をゝ
書亀を屋ゝてゝしゝ法ちゝ
をれゝ伏見ゝ伊家乃記
を供奉ゝ人やすゝ忠成ひ

ゑる色すきゝく供奉をつとむ
慶長五年関原陣ゝ紀
台徳院殿宇都宮より直に本多路
を通り沼上ゝ渡ゝ忠俊
きゝ出ゝ信濃
同十九年大坂御陣より青山伯耆守
忠俊が組より廉し
台徳院殿より供奉
翌年大坂夏陣ゝも御ゝ忠俊が

組ゝ廉して供奉ゝ五月七日
平野口より合戦のゝ紀忠成
子孫ゝいつれ共ゝ敵乃柵
ゝ敵あさう
より敵ゝ出ゝ玉生のゝ
小ゝ中ゝ紀中沼大隅守今村
伊豆守ゝ逢する人今村
ゝ家をとりゝ世ゝを御ゝ
墓碑ゝ大久保左馬元なゝ

志右衛門城方よりこれを忠成と一和
まあると暫あるて乃ち中山勇紀中を
こうり忠成てつぎくいくく沸方
乃ち陣鋒動の体あり忠俊が旗を
しるしとすると忠成先を
きして忠俊が旗をまりを呼とよ
蜂須賀彩右衛門こくいくこと
なりはとで小戦を旗乃進退を
ふよ酒をへしとるるこれを

約束くこをめこり兵をさしむき
して乃ち忠成ハ忠俊が陣よりに
凱旋のこり 御前前りをひく諸士
乃軍功をえこひこふ忠成も又
先ってよりこく抵抗し戦功を
ふこをにこをひく麾賞こ
てよ石は紙地をこ人を
元和二年
台徳院殿乃おりを沸書院

書付紙にて
同日ゟ日向玉椎葉山一揆の儀
安倍四郎五郎と悪成　命をうけ
下り役地ゟ
ゆきを
寛永三年拾五位下ゟ叙し
玄番頭ゟ任ず
同八年
将軍家の鈞命をかゝり甲別
乃書をゆきとあり翌年ゟいろ〳〵
江戸ゟ
同年御ゟ　命をうけ肥ゟ
筑前の御城番をゆきむこ乃儀
乗地二千石とくゝ御ふ

忠重

四郎左衛門府
元和四年

生国相模

右遠院殿より祈願を
同八年　厳命により清書院番
をつとめはあらしらあらく伝小姓組よ
入り番を仕りそむ

忠永

寄大番頭
元和元乙卯正月三列よりをもく
ゆるされ
大番頭より留守居まで

同年夏大坂御陣の供奉を
つとむ
同三年御書院番を仕りそむ

忠愛

長十郎
寛永四年
右遠院殿より為
同五年御書院番を仕りそむ

女子

設楽兵庫助が妻

忠常

加賀守　母八石川日向守家成がむすめ

天正十八年相別小田原陣ときに

台徳院殿御中十二歳小

もつぎめ御出陣あり忠常十一

歳にて手ごひきを仰つる

又禄三年

台徳院殿乃御前にて元服し

御諱乃字を賜ひ忠常と記忠常

十六歳なり

寛文五年毛尾系勝奥列りを

記し漢文乃ち記

大猷院様東へ御出をもむきあるべて

小山へ御陣をとり給ひ

台徳院殿八字郡之内御陣をとり

家康父忠陳ハ清洲城主ナリシカ
ハ清洲城ヲ去リ遠州ニ
住シテ忠常父子ハ引テその兵
なるべきを所存と率て先鋒
ヲ列ヲ付テ石田三成と方ヲ
ヲ分て謀反するがゆへ
台徳院殿本多忠勝を庵原ひて清正ヲ
乃と紀忠常伊豆ヲ法ヲ
同ものを伊立伯下小倉一加賀ヲ

紀ぞ

同十年

台徳院殿将軍御出賀乃と紀忠常ハ
御供乃役ヲ

同十六年三十二歳ヲ以て卒ス

忠總

[illegible] 伊豆 伊豆守 母同お
外祖父日向守家成が家督と継ガ
ヲ石川と号ス

教隆

右京亮　母同前

文長五年奥別陣のとき教隆

十五歳まゝ

右徳院殿より付奉し宇都宮

いくさもてよりて石田三成上方

まゝとなく謀叛つき

右徳院殿末弟誅を殺し浮上洛

あり教隆幼少ゆへ共伯父

位別耳取て

命あるゝ江戸へ

同十年

右徳院殿将軍宣下のとき教隆

従五位下に叙し

同十七年　勾命より下野殿組

乃頭となる

同十九年　文忠藤原勤氏と

ゝふゝり教隆も川越へ迯

元和二年奥別南部
左遷
寛永五年 御赦免ありて江戸
より帰る
同十年 作事奉行と御書院番
頭となる
同十三年 大番頭となる

教勝

宗三郎
寛永九年
将軍家へ出て御目見
教房
本五
寛永十八年 御作事
竹千代君へ出て御目見

女子
女子

女子

女子

幸伝

主膳正　母八忠常よおるゞ

文化五年　奥別陣乃と紀十四歳

なり

台徳院殿てきこびとなりはつり

本多忠よ借女　伝別耳記よ

なり　幸伝幼年なれてより

命あらく江戸かへる

同十年

台徳院殿御軍　宮下乃と紀幸伝

従五位下てに叙せ

同十七年　伝ふより出ハ姓紀乃

頭となれ

同十九年　父忠隣が領度てより

川越てに遷ろうたち元和三年

奥別清輪て左遷せ

寛永五年恩免をうけ江戸
すまかへる
同十年　作ようと御書院番に
かしらする
同十三年旧役をあらためて大番
頭となる

忠時
宗四郎

寛永十三年
将軍家を法礼す
幸治
小吉
寛永十八年　約命をうけ
竹子代君に仕へる
女子
女子

成尭

従五位下　図記

母ハ上杉外祖父なりやし
なりなりて子となれるがゆゑ石川
と号す

元和元年夏大坂御陣のとき成尭
奮撃しつて敵の首二級を討と
て搦門に於て戦死をこの時
成尭二十四歳なり

忠尚

平右衛尉　母ハ上杉おなじ
年いとけなし

大膳亮

台徳院殿に謁したまふ
寛永十九年父忠陳が領地小
相列小田原に蟄居を
寛永十年よりて
将軍家に謁を

母は乃秋院小姓組より列し奉と

忠村

清左衛門　早世

母八上野ある者

女子

母同家

忠任

加賀守　母八奥平美作守昌信の女

大猷院乃御小姓組より

寛文長十六年十二月忠任より

大猷院

台徳院殿を祭し奉り

将軍家より法名を文忠常が遺命

をつぎ給地二百石を賜ふ時忠任

八歳なり

同十九年正月祖父忠陳が縁座よ

ちちく 蟄居を
寛永二年 涉勅免すちちく
右徳院殿
将軍家すり 渇しそして酒つる
同三年
将軍家御上洛のとき 忠任供奉す
同年十二月 従五位下に叙し
加賀守すり 但馬
同九年正月 流刑加納の城を給ふ

五万石を領地を
同十一年
将軍家御上洛乃刑 流刑 別 俣すり
おびただしく盃酒を献じ 涉入洛
すり 供奉を
同十六年 加納をあらためられ 播刑
四万石乃城を海ゆり 七万石を領知を

女子
母ハ上ふ おもの 里見安房守の妻すり

女子　女子

母ハ上ようの一なんぶあいづのかみが妻

母ハ同あ　川相石見ちくぜんのかみが妻

家紋　上藤丸乃内大文字

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan